

『ランナー 奇跡へのチケット』上映会を祝して

2020年11月28日
明星大学学長 落合一泰

国際コミュニケーション学科「映像翻訳フィールドワーク」受講生による『ランナー 奇跡へのチケット』の日本語字幕が完成し劇場公開されるとのこと、おめでとうございます。

本日は所用のため、オンライン上映会とトークセッションにご一緒できません。しかし、受講生の皆さんの努力で、「記録」をめざすこのランナーの物語は、日本の観客の「記憶」に残る映像作品になったことでしょう。学業の成果が社会に役立つのは大学として誇らしく、たいへん嬉しく思います。

映像翻訳は簡単ではないことでしょう。同じ言語でも、話す地域により意味やニュアンスが異なるのが通例です。南米コロンビアのノーベル賞作家ガブリエル・ガルシア=マルケスの小説をもとにした映画に、リサンドロ・ドゥケ=ナランホ監督の『ローマの奇跡』があります。死んだ幼い娘が活着ているかのように眠り続けている奇跡を、なんとかローマ法王に認めてもらおうとイタリアに渡り、ローマ中を奔走するコロンビア人の父親の話です。1988年のコロンビア・スペイン合作映画で、1991年に日本で公開されました。

私は1984年8月から翌年3月にかけて、コロンビアで文化人類学の調査をしていましたので、その土地のスペイン語に親しんでいたのですが、試写会でこの映画を観たとき、違和感の残る場面がありました。ある明け方、疲れて家に戻った父親に、同郷人の友人が「赤ワインはどうだい？」と言うのです。

“Tinto”という単語ですから、確かに「赤ワイン」です。しかし、コロンビアでは同じ単語で黒々とした濃いコーヒーも指します（「染色」「深紅」「漆黒」がティントの原義です）。徹夜明けで疲労困憊の父親に、「濃いコーヒーでも飲めよ」と友人が勧めているのです。映像翻訳に当たった方は、きっとスペインでスペイン語を学んでいたでしょう。同じスペイン語でもローカル・カラーは各地にあります。すべてを知ることはできませんが、早朝から料理抜きで赤ワイン？と疑問に感じていたなら、調べていたかもしれません。小さなことですが、原作に忠実に、というのは案外難しいのではないかと思います。

「映像翻訳フィールドワーク」受講生の皆さんは、『ランナー 奇跡へのチケット』に登場するいろいろな文化的背景をもつ人々の繊細な言葉遣いに、耳を澄ませたことでしょう。それでこそ、「フィールドワーク」と呼ぶにふさわしいのではないかと思います。

改めて、科目担当の川又孝徳先生、新楽直樹先生そして受講生の皆さんに敬意を表するとともに、上映会をご後援くださる国連 UHNCR 協会、学生のためにスポーツと難民というグローバルイシューについてお話くださる高橋尚子さんには、明星大学を代表して心からの御礼を申し上げます。

上映会とトークセッションが素晴らしい学びの2時間となることを期待しております。